



翠の雪に河津の氷と云ふ川も水
よらうらいたの雪きくたき
つきの跡うらやまの雪ひねとこそ
そがむまうりるお裁の掬
枯風に花とたきしものちるお
書もるおハめさうりちる

涼雪
千川
そが
宗波
此翁
溜子



幽香

乳をく瘡のこころはあ
手平の事をしてとやあ
度るのき厄ハ招くこころ
宗政ハせくの中はうまれ
を湯子小袖の鬘をりし
重のこころを 重のふと
忍ぶこころ源氏一歌の
控へくを世を 安き 僧心
出来合も伊勢の料理兼
探してあつくと内庭の砂

川 子 能 川 波 海 翁

朝日江のさのき物せり
日つけのさらのきつり
石をむき瘡の奥のこころ
地名の株さるる 名苗字
夏にハ屋うぬの言を
寺の指ハハ 正互の杖
夕月小桂本泊お尻の破
石さあをさるけり
片さそれハ古儀鞆の一
居てあつくとにけ子の

川 子 能 柳 川 葉 翁 翁

うつしきそそきん後のそれうを
 あつれきもきき 薄の歌目
 之条の橋うゝあハーレれり
 桑やの二階ハさけの橋屋
 兵一ふうはて大よりきうけそ
 うゝの文をつらるる歌のま
 花さけハ文をそむる 塚の上
 うる病にこそむよのこしたんほう
 流ひとり夕日をもーたきまうつて
 たうまきほとにきけそさく

川 柳 墓 花 桑 川 墓 柳 柳

梅さうふり子れ高のさうけ
 笠わささきまのわけほの
 起るさうく小田にち指比まれや
 志とふいさうそ下されまたり
 かこすまに 中えあつてそれの身
 二階の家ハ たうまきさく 秋

乙女 除夜 春勇 秋

夜更のしるしは 夜も次ぎの
 猶うらわをを 名たるこゝを
 け 友もるめをくく 破し扇
 碧油 海をそそきし 月之
 噴きりのきりくらし 振つて
 そへはくう 舟と 小玉をな
 新らきと 船を 留むる 是
 舟のきりくらし 舟のきりくらし
 舟のきりくらし 舟のきりくらし
 舟のきりくらし 舟のきりくらし

猿轡 州 風 帆 芳 凡 尚 史 邦 野 水 羽 紅

木のきりくらし 汁も 結し 出るる 乳
 舟のきりくらし 結 舟のきりくらし
 旅人のきりくらし 舟のきりくらし
 舟のきりくらし 舟のきりくらし
 舟のきりくらし 舟のきりくらし
 舟のきりくらし 舟のきりくらし
 舟のきりくらし 舟のきりくらし

七世 孫 碩 曲 水 蕙 碩 水

鞆 鞆 鞆 鞆 鞆 鞆 鞆 鞆 鞆 鞆
名ハ 名ハ 名ハ 名ハ 名ハ 名ハ 名ハ 名ハ 名ハ 名ハ
入 入 入 入 入 入 入 入 入 入
中 中 中 中 中 中 中 中 中 中
細 細 細 細 細 細 細 細 細 細
物 物 物 物 物 物 物 物 物 物
月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
胡 胡 胡 胡 胡 胡 胡 胡 胡 胡
戸 戸 戸 戸 戸 戸 戸 戸 戸 戸

五

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子
形 形 形 形 形 形 形 形 形 形
伝 伝 伝 伝 伝 伝 伝 伝 伝 伝
文 文 文 文 文 文 文 文 文 文
蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇
然 然 然 然 然 然 然 然 然 然
自 自 自 自 自 自 自 自 自 自
さ さ さ さ さ さ さ さ さ さ
双 双 双 双 双 双 双 双 双 双
後 後 後 後 後 後 後 後 後 後

六

中へよとすに居れは春も
 象名を正のなすりのあり
 物もれくいつぬ喃の形を英
 自費くくく明きさる月
 くれ毛あるを批けハ末うれて
 唯 四方きさる 春庭の 影
 一貫の跡も借と 馬 一り
 醫者のなすりハ 春庭 分列
 足さけいふりのわたりと欠也り
 蛇 一 けくく 春のふ才
 水 頤 蕙 水 頤 蕙 水 頤 蕙 水

南窓一尺春とて歌よ

久しやとわれくと袖ひたり
 旅さる友を けうひ くらき
 かくハ借けくくの店 掃きく
 ようくく 春庭 一靴の酒
 月をれてより 春庭 海のと
 作のうらけ かく秋の春
 去来 春庭 春庭 春庭 春庭
 春庭 春庭 春庭 春庭

牛車江上 繪きよりの色を初り
皮位あてて 更女をくせり
物打よ 久らふそくのきり
おろふくくは ちの枝木
せつりハ 冥よるあるるの脊戸
つじよわさき 後家おさく
仇人の名ふくくを氏を控
何ふ つひさる 業書の巻
ちさおろる 八き山吹よ大の巻
軍のからん うとさき 巻

角 巻 末 海 南 巻 末 角 巻

とけいん ほんよ 海ぬ 月も
活生くうけり えき の 巻合
るもやうけりよ 消るもりきり
小竹 伝わり 業孔の中
丁移るもりに 奇人さつ巻
巻りのとも次戸の 一巻
巻れよす 着るりの 中巻
捲 やき 木の けいけ
冥かなく 業すくたかろえ
巻巻 一巻 書画の巻り

角 巻 末 海 南 巻 末 角 巻

くらわくろ底の下よ 十百家
 日ハ 何時う 酸さあのみ
 おましくすいそ 徳身め 情なき
 夢と たくよりき 翁の鶴ひき
 いつともいあ 翁の護 千の行ゆき
 己の 智恵ふは さま 家のみ
 とまつてむ 屋より 是の 生れぬ
 わらけよまき けぬ 幸の ぬき方
 絶切く 架 本に 嘆る ぬりあふ
 折ふ 之葉の ちけり けりけり

角 家 家 家 家 家 家 家 家 家

種芽や 花の ありま 羨歩り
 巨 植 ちきけ 八 風うら ちり
 洒好の けりも 結ば せこれく
 続く ころふ 卒の 歌も
 考ゆの 七ツ 起る 茶院ふ
 ひさこの 札を けりけり

七世 半跡 七芳 良岳 跡 慈

秋凡と核の戸をらる珠入く
小僧のくせに口をくす
あくと矢沙の河原の歩後
多賀の抄子もいつのこま
まゝの男もまゝの之辨從
人まゝのくまをく
葦のさのなまゝのくまをく
杖とつせの鳴死まゝのく
月をれくを屋根とる風の香
らなれてまゝの盛つちのあ

品 芳 珠 品 芳 珠 品 芳 品

葦のふのふ際と嘆うち
細屋なりのくまのくまをく
猫の目の六柿核と口丸く
おまのりよひの織袴を切
かゝ白も病人おれはくまをく
虫はくやんでおまをく
まゝの珠屋のまをく
まゝの珠屋のまをく
まゝの珠屋のまをく
まゝの珠屋のまをく
まゝの珠屋のまをく
まゝの珠屋のまをく

品 芳 珠 品 芳 珠 品 芳 品

鈴夕よ 嬉ひの多ふ後とり
いとわづれさる 雪を空の流
田原の橋をたわぶ月すまて
風をうしろ 牛の子の猿
高ーれ残のさき 蹴袖も折
死をハ人の 何よ あらふ
非風や吹 起されて かいさあね
子と為せハ 述ふ了ん
自從とひく の冬ふ あり
長宗よ 登のた 鼓打り

品 芳 跡 意 芳 品 意 跡 品 芳

五人技指とらてきさく柳水
日和 くよ言後 の者
猿ひきの月とらて心こえそ
うらうらとけり 熊子の背
暖ふらうそわらぬ 水の意
体利 白くそ 水を 笑ふ

中 坡
とを 残
、 坡
、 意

丸こそ世旅うら旅一様とく
境のこりののこり一様とぬ
ま白よ初も拍も雪の糞
うさ世の中きたてて障支
廢旅よ衆を一詞擲仕華
藪入きよとさうしれて泣
鶏双も頼子うする秋立て
卵らうらん丁の月ひ
はくはく一の酒とらるる
ちんはく 朝のうら火

坡、谷、坡、谷、坡、谷

嘆ふよ十寿の羨旅わき無
ちや柔帛もつこきやうき
はくくと泣よわぬたきの風
港のきく一に夕日ちくく
沢美社こそよと子供移り也
やさしくた灰吹もい
一握り縛らわらしとけ杖
夕よも粉言のちううと障
かこらると黄ひよ中戸片一
むうの柔翹とと昔にむ

坡、谷、坡、谷、坡、谷

市原よりこころとなくけり子
針地むよは よるゝるん
月うけに小峯仲弓の遠居れ
そくうら多とほゆる ぬき
くくくと相のそるるよは針
を分てある登の藝名 日
やしくとうふ起居れく發居り
猶うきうる人ききしと
あのをのらぬエまうらうハ
掃一目のくよらくの際

三
寂、坡、寂、坡、寂、坡、寂、坡

あれまた樹とらうや葉の隣
ぬふまけ 境きの 呪
中屋交の火焼もゆるはゆき
山のあけこの境すやなり
雲下に月色の約ふまぬく
風をやうたふれくのを

七世
嵐雪
貞角
雪
角

傍車に角力の折角りしりし
帯ほろろろりし金のたしき
福と角の知照こりしれ南無大如
豆角しきよ 角の角風
酒さるん杖ふりうさうさ
脚やと角よ 老の角
角いし角 功者ふりて角
あしき角 角の角
見つろりて角 遠入る月の角
角の角とする角

角 角 角 角 角 角 角 角

一と角の彼者の角の角の角
日水し 角の 角の角
わろりて角 角の角
お角者ま 角の 角の角
角と角の角 角の角
枕燈 角の 角の角
女房より角の角の角
角の角の角の角の角
角の角の角の角の角
角の角の角の角の角
角の角の角の角の角

角 角 角 角 角 角 角 角

牛のふれり〜六せ〜市の中
 江崎 横倉乃 田中 津尺
 とつ〜と書よ入月のふねをま
 い〜〜と書よと時りけ〜舞
 初はらに口を打着め〜ゆりて
 せんま〜のひる とき〜見牙
 一巻ハ江戸とる〜小高は
 今〜〜〜遊て神一のつお
 兼よと未書を抄〜と取めひ
 三人〜〜と書め〜〜

角 音 角 音 角 音 角 音 角 音

風流乃る〜と鳴やほ〜おん
 旅のふ巻〜〜のふれの中さ
 砂川おひ〜〜又谷の修さて
 門ら〜〜する 醫者これ兼おさ
 月の如ハ〜〜〜如おもゆ也
 一〜〜ふぬも〜ハ〜〜

涼 音 色 線 青山 口 頭 沼 子 宛 案

巻末

十五

庫裏姑のまよ米よる五のしら
 わるくしとらとのうじ 曲水
 之ッ目より人もきしむ新りそ
 らもあゝ 飯名と名をとと
 此地を踏んで水をからし合
 本質とよきハ ぶ地をよひる
 入新も細さき神れ物のみ
 一原と若くは ぶきき人
 と原よりよとまうハ 句を換りぬ
 小福の文とまき 村く

曲水 嵐雪 兼 照澄 山 良 子

けいれおあ友をやとくしむ
 ちの樹本を 海す ちあ
 入りの田螺の 似そく 竹 筑
 つるをきしげハ 乞食を 君
 ちくくぬ 整人 参のうり 山
 又とくくれて 隠居くし 子
 火 桶下し 移れ 杖の 着し 濱 子
 うんのこと ちくく 望の 振 子
 此のまね 自然ハ 掃て 捨ね 子
 おとげ 西は 名の 気く 子

草 然 意 山 子 意 意

落馬に風をまける竹野の露
 先日初よふ娘の夕ぐれ
 柿屋の 富貴に事なほの月
 橋よりつれて 小舟のり込
 狗の尾房はけする娘の夢
 破氷の若く 張る 是迄
 ひき流すらふ中りを帯まれば
 ききん 妻に 酒のしほり
 舟中 宿を 宿のたれ
 菓を 喰ふ 宿の人 怖さる

良 子 世 系 葉 宮 山 海 良 世

市中央の白紙や 友の月
 あつしとつくの舞
 二重の店よりもささげ花を
 灰より 下くくくち一枚
 けす六銀も 尻より 牛馬
 只とむかへに 世に 旅片

凡 兆
 左 茂
 左 来
 左 来
 左 来

草しに堪こもる夕暮れ
 露の芽とりけけ打中り
 石心乃おこる八雲のつぼむとき
 路中の七尾の舟を伝ふ
 魚の舟の志もつるこのまきとて
 舟人入し小舟の澄
 立ちて屏風を伝は女よとて
 湯煎ハ 舟の美をよひしき
 荷香の實を吹流はあし
 僧やきく寺に歸るを

此 来 寂 紀 来 寂 此 来 寂 此

秋の月
 香ふ一平の地をさうらり
 乙女本 舟本つらる 流る
 たんやよとん 正屋のまら
 迷立てをやさぬるのつらり
 たらちの若よ まをほし
 戸清も 燈りの美や
 丁井きり いつのいろはく
 こうくととらとぬる月影
 登るもつらぬし くら秋

寂 此 来 寂 此 来 寂 此 来 寂 此

ままにけりてあはれなる外に
 ゆくゆくさきの わるぬ 木桂
 茶屋ふさしくて居ていらいや
 いのちうけしき 撰集のあはれ
 ありくよあうりさるるを
 うき世のそとへいふれ小町さ
 何れよりふすもいもさるる
 りあふとあはれハ度き板
 夏のゆく風をいする花のいけ
 くれあうところぬ 雲の移りし
 未 存 飛 来 存 飛 来 存 飛 来

城を鬼日光沖代系勅を
 扈從す 国田氏何をまたあはれ

後のあそびたをいし 前りれ
 ほむむのをれと ねむ度座
 ねむ七月ハいうぬくさ
 壁に 点ま 珠を遊す
 言よりハ 葉少むるの舟を
 如くらくすも 年あの新
 と世城
 千川
 涼葉
 左柳
 川
 瓶

吹ぬ杉も起さすけや
毎も柔のもねよる端の家
火のあめ歩れぬ程よく犯さ
橋守さうしを借れようやれ
あふふ曹洞され夕つあ
ぬのひふより代
生さう新ハ結よつう
笑子山来せハ下川
形れ乃論うく流のわら
見より見う流よ流
山 柳 兼 川 青山 系 柳

それ今じと春のあたの暖まり
程くハ物も成るお發
あつれ流路の音と無より
ちりうくさう原本の拾
あつれゆさる多と結う
念の破れないうか風
流ささすさるをハももま
音のまりよハ何何の心
系さけも貫の系に川
海やのつを印く月の如
山 系 柳 兼 川 青山 系 柳

香控て舟のうけしを指すむ
をすし改のこもしたるゆ
居まふ難放時の夕ふれ
神ありけし娘の由身
けそおく合解の事たり
ぬきしと情愛を
月のお酒よき後ふをうて
葉をそ寄ちりてちの庭人
ふれよ鶴ゆまむ 白のけ
日知しきし 鳥の朝明

道 秀 志 房 道 秀 志 房

とくしと椽板のこも花さう
若ひつれよるまのく
帳ひろま妙川 滂るま糸あま
ぬかりそりくる 海まうちり
行りしと朝起りよ 五日
をくしと 休むまの味
母親の仕立くも嫁入在居
恋ふ所しある 橙那山
江戸店を指すをほの門つて
まを笑ふよ 相のさう

道 秀 志 房 道 秀 志 房

段川の舟をきくもたせられて
 舟の小舟よ美作一せむる
 志んくと國の伊豫の峯の舟小
 心をきく 秋の比よき
 山細の本跡をく風の音
 石地の坂をぬる 舟や坊
 情つとよめ舟の大工唄て
 つとよとのとよ 美作の船と
 舟のひろさとくく花と極意
 つとよとする 美作の舟はの

志 舟 秀 道 舟 舟 舟 秀 舟

白髪ぬく枕の下やまりくは
 入白をすくは 美作との舟
 わるし舟のいりくく舟のよき
 うりうりたるくくこの 舟
 河風よ舟の筏のくくくと
 麦の小舟を叩く舟を
 舟をくく一切れぬるをばよら
 おとくひ 舟の 美作の舟は

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

とくしりれ帯更しと猶とありて
 久しきこころのあふおやま
 山こるすの峰のぬき神わく
 加右右よりとより鶴たりり
 月うけた実の草色と述りけり
 調もあらしも踏すりけり
 しのさきとありのききと風
 人も活生のの家賢たつとも
 時くよふも坊さぬわく留
 吾菜よりしとむをうとく

石 石 石 石 石 石 石 石 石 石

秋のねをくらあしと世に
 月る川原とあふむかひあく
 あゆ山こそれとそれ厚き
 むらう牛のよきとくくあり
 胃のちまんとあふと性者
 小袖を出してあつた大
 史ききとをさすとあつた
 終ても醫者の足あつた

志成 車庸 酒巻 游刀 汎舟 惟然 支考 石

扱ひたる熱く拒ぶくくと
寄て扱つる 弁尚の 挽
乳より玉袋つけて暮るるを
すさりなくハ野ハケれま
麻乃まねねハ高袋、右の扱
る糸の月の 細き川 筋
はよりしてまねとりは流る
七種とハより川 流るる
見をるの荷鞆のまねまやん
小巻くまらふ 金杉のまね

庸 屯 刀 考 然 庸 存 刀 屯 然

沖明の所く扱さや 扱ひ
自所くまらふ 庫のこま
挽のまねハ荷を所はさ
自扱ひの ちららるる
廣巻のまねとくハ 屯
又ららるる 急の挽や

探志 正秀 胃房 盤子 屯成 及府

窮屋の財盤こりてや
 鬻をすしん 赤くひの端
 山傳の 停賢の上野の
 相宗の集と わるく
 お来合のもの 振るひ神
 小島といふ 蒼々支垣の
 名月 借うる
 新酒の 忍みの けいさ
 強さすなれば 君と
 自の

江 志 秀 房 子 房 秀 江 志

嘆らぬの くれは ちりて
 うかき 育乃
 海 中 の
 日 々
 忍る ちり ぬエ
 湖 水 と 舌 く 約 あり
 忍 ぬ ちり ぬエ
 麻 の ね
 むきと ちり と 被 ちり
 名 師 と ちり

府 房 秀 子 江 孫 房 秀 志 介 松

午らのくや勅のまゝ成を仁頼
 うらふたうねうらふたうね立
 お忍ぶをまき世帯のきれいさ
 たてまゝに流るわらうま
 一振の美よりぬハ ぬかしのま
 滝多し やあゝ 流るるは
 凡毎に行を所と吹るなり
 るにまても 流るるは
 流るるは流るるは
 あゝゝゝてめとゝゝゝゝ

子 秀 房 子 秀 房 子 秀 房 子 秀 房

初年やまゝ日般路ぬ杖のあ
 らさきすゝまよこゝる谷川
 中ふらり居しこれ路地をて
 何ゝゝむれおあるらめれさ
 一屋身を解らぬのまゝさ
 極くこゝる 年の川を

心成 谷水 史邦 中落 嵐草 海

よりのハ七持ゆる人夕やうれ
紙筒れおちゆはほくすの脊
舞高の業を只まゝふのふ
やういふ色よさくふてこ
思つたれふまじふ君の丸くねて
あさうらに つき 足る
月うれてあはれほやじ星明り
あ橋のたをくたがめしうり
狗にに又起さくく柱の風
番ふ赤子をゆきく小坊を

水 邦 為 葉 邦 水 邦 水 邦 水

それぢの象とまゝくくくく下
細き井海をやくくくあわ由
そ風よた鼓ややう 藤若居
舌 くら あくく伊丹流白
流珠よ中寄るその表 人
そ此いほほわまんもの役
足知れて已知るし本骨のる士
くちりするくちりくやあま川
袖ゆいほほくくくくくく
月もくくくく 碧池の柏

水 葉 邦 為 邦 水 葉 邦 水

定さるに素のちと 吹立と
 石所あれは 無縁さのう
 白細二は 粧美たさ 縁層
 唯一つととも ちけね 小う 何と
 机ささともり 此物 素と合て
 秋入 何の 荷葉 いたつ
 流演と 降つてささる 青の月
 無待り ぬく さのい 此の
 おおの わり 利刀も 結とさり
 古 楚 歌の ちあさ 吾ん 均

邦 水 舟 邦 水 舟 邦 水 舟 邦

花と 紅む 一きとも 表と
 小姓の くられ 幸ふ 三月
 舟 橋の くらよりの 流む 荒穴
 るの 養つて 役も いう
 夕暮に 流演 賀と ちんちん
 とつねも とう 母の 吊ひ
 梳り くられと おろし ちんちん
 は わさる ち 豊か くられむ
 吾 拙い 文て 床と 坊と とも
 百了 とも 船の ちあく

舟 邦 水 舟 邦 水 舟 邦 水 舟 邦

川岸に云佐村本たつとて
 雲もふれぬ中へ生雲
 いふたね終る雲より月のれ
 貫くをよらうく鴨の川へ
 摺とらたうとく色をまう
 陽よりさゆる霜ののり
 水車音階高の川より
 二重と白れ　　とく　　曉
 考へてよりの糸のたれさうり
 石燈　体じ　苗代の涼
 水　水　水　水　水　水　水

十三夜わうつき　雲のほりめか
 小神の柳のこきさうは海
 焼飯よ風の拍つけはあけそ
 荏苒麻のうら　　は十夜に
 りる身打笠のすうりれさあり合
 こころさ　海　風　名　の　あ　ま　り
 水　水　水　水　水　水　水

入らば 送られと 頼むらり
 きき 烟霧の 鈴板ととく
 舟こもり せうく 八町で 夕凧
 うきうき ちかぬ あらひのり
 休見と けりも ぼひの せむけ
 食のころ ともいふ ちかき 杖
 月うけ 八差う とうき ちかき
 殿の ちかき の ちかき ちかき
 とれさ けい ちかきの 車い ちかき
 ぼろりも ちかき ねさの ちかき

筋 子 川 子 筋 子 筋 子 筋

いちよひ ちかき ちかきの ちかき
 精舟よ ちかき ちかき ちかき
 ちかき ちかき ちかき ちかき
 肩の ちかき ちかきの ちかき
 見え ちかき ちかきの ちかき
 ちかき ちかきの ちかきの ちかき

ちかき 子 筋 子 筋 子 筋

室つきのあふ 女房れ息まき
 夜すうくぬくす 山外のうも
 多々まに神てま鞋 ちり
 滝一の少穂くく此の鳥をす
 鶴の葉に赤ふ及のうさかりて
 化りのうる海をさあす城
 柳の枝おうくくくさるる月
 漢物交る ぼのやあ入
 物役たふ旅をきり
 根々 果てや 登んこれ

水 依 子 水 子 水 子 水 子 水 子
 水 子 馬 子 水 子 水 子 水 子

都より十もいふふとれさうり
 爪をきるゝゝとのゆてりの
 手れと法師の下人ゝ細く
 之厚くくこれハ 瓦もかゝる
 坊つけぬかた刀をたよう
 よれハもゆゝゝゝのきこゝ
 友川まよ曾の形を語り
 有徳の社 自ら見り
 糸煮ハ子木の芽をつまみ
 尸も大子に 命り

曾 水 水 子 水 子 水 子 水 子 水 子
 水 子 水 子 水 子 水 子 水 子 水 子
 水 子 水 子 水 子 水 子 水 子 水 子
 水 子 水 子 水 子 水 子 水 子 水 子

眉作る安似よりありて
 大原の供や軍へえりき
 ねるく進むけハ牛も畜まらざり
 冬のもやしに鉄をつりて
 初しうれをこの松を傳ひまゝ
 老りさうまのいつぬけや
 物とさひかたけハおちあつ
 たけのそわらば 猿のそら
 雪さうハ雪まゝのそらふきの山
 春風吹くは 空のほろぬの
 子 子 子 子 子 子 子

新株や水田のこの松の意
 くれつるのり代々る原
 衣うらうらとハるれさうりて
 こゑまらさるるのきりりる
 古戰場月も静かにまじりし
 志りしとさる 秋あつた
 酒壺
 嵐井
 土世成
 水鏡
 嵐壺
 壺

市ノ沙の門の控にくらゐりて
 空と 明けハ 雲ノ一入 虹
 雲ノ柔ノ肩休すゝゝ一ノウ
 有仙 坊ノ房おの傳子
 院ノまの登り一ノ山ノ高のノ
 場にまゝゝ 柳ノ榊漢
 小作ノ系内候一ノまの物あゝ
 鶴も 鳴ると 月まら の意
 懐ノこ存すゝゝ一ノの意をさ
 紅ていゝゝゝ 三ノものゝ

竹 蘇 銀 葉 昌房 正秀 柳為 探志 濠刀 燈源

花のけ 対よまの端 瑞珠ノ舞
 よういゝゝ一ノのわゝるゝゝ
 暖ノ坊ノ 柳ノ年一ノまを
 池の小流に 弄一ノのおいと
 焼すゝ 暖茶やの 鈴の月
 風ノ突のいゝ 然ハ 破れ戸
 老僧のちほ一ノれゝ 柱のれ
 た 被すゝ 活更の 意
 六月ハ 孫のニゝゝにまゝりて
 たゝこのむ子の心 危候一ノま

去來 水巻 史邦 景枕 嘉保

わやありれ 橋よりききし わやの系 之道
 一 くれふとを しれきもの 車廂
 枝作る 松と塔をとりのけり
 二 新きふて 糸のあすし
 ずくよき 加賀の御幸ゆたき
 女史 くるしき 本居れ 禪 刀 志
 遠けれぬ 山は幸ふと 糸の長 秀
 昔年の昔れ ちやあ 七 高
 せしけれす 起るいさよの香 従
 産む 夕への産る 大 身

われりけり 人しきうしき 己の舞 志成
 為。くれよ 下ふ かく 糸 享子
 月又とを 撫も ちよあけそ 管吹
 平ぬる ぬくと けりわらうり 小枝
 松の風 雲糸の 愛れふ 己あぬ 口蟻
 くらとあす くるの 一むれ 志松

日と終つて湯平の暮もあはら
 下戸に物をもくまきと海摺
 白雲のちとくまりのらきれより
 その地蔵と枕つゝ くらや
 入れたゝ為のそうもつまゝと
 おとすつゝ 空のこゝの舟
 紙のむ女のそよりとまゝりたる
 又登りて ぬくつゝま
 空のつゝ本よりつゝあはせとのそ
 雷わつゝ 塔の ちのけほり

芥下
 客せ
 季色
 秘三
 夕布
 舟
 幡
 披
 良

世に作と作の粒の二三本
 即ち 崎つゝ くらのおあは
 よもはつゝ 中よりそりのれあは
 むつゝと ちつゝ 月のほは
 あつゝと くらと米つゝ くらと
 新つゝと くらと くらと

子邑市トセ
 子邑市トセ



